

「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

平成 25 年 2 月 24 日（日）16:20～16:35

さいたま新都心合同庁舎検査棟 7F

発言者：公述人 13

まずこれはやんば館に設置されている洪水氾濫図です。いろいろな想定があると思いますけれども、冗談ではなくて、もしこれが事実であるとすればさいたま市が水没してしまうことになりますから、関東地整も移転してくださいということになります。私はこの資料を検討した結果、次のような結論に達しまして、利根川・江戸川河川整備計画は以下の点で有識者を入れ替えた上で出直すべきだと考えます。1つ、ダム中心の治水計画は既に破綻しているということ。2番目、ねつ造や情報操作した資料で審査を進めた、これがはっきりいたしましたので河川局の責任者の処分をお願いしたい。3つ目、基礎資料のチェックを怠ったうえで、それを容認した日本学術会議土木工学・建築学委員会の会議での撤回を求めます。また、火山を研究している立場からここにダムを造りますと明らかに災害を誘発しますし、そこに蓄積された土砂は下流域にとって大規模な土砂災害を引き起こす。5番目として利根川の主要支流河川、これを含んだ整備計画でなければだめだということは、私の著書であるいは論文で公表しております。6番目、3. 1 1の影響もありましてぜひ保水力の向上のために森林を更新ですね。さらには都市部における低水の量や浸透性の向上というものもシフトしていかなければなりません。私はこの中で3番について研究していますのでそれについてご説明します。まず、お手元にお配りしました1枚目のプリント、2回の講演の資料でありますけれども、左側のほうをご覧ください。これは国交省が示したあるいは日本学術会議で提示いただいた氾濫図です。既に委員の大熊孝さんが残念ですけれども、河川局の提出した氾濫図はねつ造したものであると指摘がありました。私は大熊先生の指摘が正しいかどうか更に検証し、また自分の論文や著書でも検討いたしました。特に注目していただきたいのは、氾濫図では台地が氾濫をし、そして丘陵も氾濫しています。大熊先生はそれを否定したわけですがけれども、私はこの地域の地形、地質を研究しておりますので、ここに井野川低地というものがありまして、この低地が氾濫をしていない。つまり、台地と丘陵が氾濫して一番水の流れる低地帯が氾濫しないという、こういういい加減な図を河川局はお作りになった。また、日本学術会議は承認していたということです。次に大熊先生の追加検証です。これは、河川計画課が実際にカスリーン台風の実相という形で借りてきた図です。これを見ますと河川の右岸と左岸で高さが違います。こんなあり得ないものが実際に出ているということ。それから安中駅や精錬所これも矛盾しております。実際に事務所に電話をかけるだけで、この問題すぐにわかりました。上信電鉄は百年史がありますけれども、ここにも問い合わせしたところ、そんな事実はありません。つまり、河川計画課の皆さんはこの地形図とを照らし合わせて、この実態をきちんと見さえすれば、これが不正な図であるということがわかるはずです。残念ながらこの2つの図をみても日本学術会議が、しかもこれ大熊先生の指摘を知りながら、河川局を正すのではなく、また有識者会議がこれを追認した、非常にずさんな検証委員会であったということです。次に3. 1 1の時にこの地域にどんな災害があったかということ、これは地元の■■■さんという方が検証しております。西埼玉地震というものがありまして、昭和6年、ほぼこれは深谷断層で動いたといっていますけれども、今回の長周期の地震の場合には、深谷活動の延長部で貯水地が被害を受けております。4つのうち、今、1つが運用不能状態になっております。残念ながらこの事実については報道されておられません。では、

こういった地震があった場合にどういったことが起きたか、特に昭和6年の西埼玉地震についてはタスクフォースをはじめとして関東地整の報告書でも指摘されているわけです。しかし、そこには地震があったけれども周辺部で地震があっても影響がなかったかのように指摘されています。実際にここ昭和6年を紐解きますと、震央から80kmも離れたこの八ッ場地区、住宅の石垣が50か所、山崩れ200か所、とてつもない被害が出ております。残念ながらこうした、きちんとした資料を国交省は提示しておりませんし、検証した地震学者さんはおそらくこういう資料は手渡せていないではないかというふうに思います。もし、手渡されていてこの事実を見落としているのであれば、この地震学者さんは失格ということになります。次にタスクフォースの報告書を見ました。特に問題とされているのは、文科省所管の防災科学技術研究所が1千万m³の大規模地すべりを認定している川原湯地区がございしますが、これについて国交省側は現地踏査、ボーリング等の結果、地すべりではなくて崖錐堆積物であるということに判明したということで表層崩壊対策と砂防対策を行ったとしています。しかし、残念ながらこの地域を埋めた応桑岩屑なだれの特性、流動機構、地すべりや深層崩壊の認識を国交省さんは全く認識できていないということがわかりましたので、その裏付けを推考していきます。これが国交省さんの最終見解です。崖錐堆積物の上に乗上げる形で応桑層があります。2万4千年前の地層がなぜか1万3千年前の地層の上に乗上げています。これはここに逆断層があって乗上げる以外は考えられない、若しくは上にあった応桑層が地すべりで滑って落ちてこなければこういう層関係はできません。つまり、河川局が提示した地すべりを否定したことが実はこの地域の地すべりを証明しているということになります。次に群馬県の所持しているデータです。これは同じ場所です。応桑層の間の中に崖錐土石を挟むことがボーリングデータでわかっております。群馬県企画部の調査です。つまり、群馬県は上湯原が巨大地すべりという証拠を持ちながらダム建設を推進することになります。次に川原湯まちづくり設計、これはコンサルに丸投げしたものですけれども、応桑層の上に崖錐土石が乗っているということはいいのですけれども、実はこれは山津波の土石であるということは後ほど進んでいきます。私はこのように国が出したもの、あるいは県が出したものに国でありながら両方間違っていたりとか矛盾するもの、県が出しているものにも矛盾するものがありますので、この状態でもし造れば、大きな災害になっていく。実際になぜここで災害が起きるかを簡単に述べます。浅間山は2万4千年前に大規模な山体崩壊を起こしました。これは1980年のセントヘレンズのものもそうですけれども、谷を埋める状態でございます。埋めるということはどうなるかというところの河床縦断面、堆積面は次のようになります。本来であれば、この峡谷の上は全面的に埋まっているはずですが、この堆積面の部分を実際に河床縦断形にプロットしましたところ、最大で50m落ちていることがわかりました。つまり現在、人々が暮らしている上湯原をはじめ、川原畑地区も実は既に地すべりが落ちている地塊であるということがこれでわかりました。では、なぜ落ちたのかということと実際に地形図を見てみますとこの上湯原の地域ですけれども、不思議なことがあります。通常、川の段丘というのは崖に対して並行にきれいなシャープな崖が見つかるわけですけれども、非常に狭い範囲内にも関わらず12以上の谷があります。しかしそれに合致する水系はありません。一部桜沢がありますけれども、ほとんど先端崖でして、ぱっくり割れた状態になっております。同じ応桑層の堆積面に比べて実に50mも落ちていて、しかも開口性の割れ目ができてしまっていて、これは水の浸食のものではないということがわかります。現地を実際に歩いてみました。これは新駅を造っている現場です。不思議なことに応桑の先端崖、山側に向かって傾斜をしている。つまり、地すべりを起こして山側に向かって逆傾斜しています。その逆傾斜した谷の中に大量の土石が覆ってしまっているということです。これは上湯原で大規模災害が起きたという地層上の証拠です。では、ホームのところはどうなっているか、ここも検証いたしました。そうすると、浅間草津降下軽石の上に、この

火山灰と同じものが繰り返し出てきます。つまり、この大量の土石、先ほど言った、この地域を襲った山津波の堆積物というのは、およそ1万3千年前に厚さにするとだいたい最大で20m、つまり上湯原地区が全滅するような大規模な山津波、土砂災害が起きたということが地質学的にわかりました。その書いた図面がこちらになります。それ以降、何があったかという、浅間山の噴火がありまして、今からだいたい、1500年くらい前、古墳時代以降に比較的この地域は大規模な土石流を繰り返し起こっていたということもわかっています。この土石流は、もちろんこれだけではないんですけれども、この背後にある崖は、高さがおおよそ300mありますから、落石の危険性もあります。まさにこういう現場に駅のプラットフォームを造って、この地域の再開発に使おうというのは、これは明らかに防災上問題があるというふうに思います。これは実際に防災研の出している、全国地すべりマップです。私もこれを見るだけではなくて、現地検証をしました。これほんとうに地すべりかどうかということで。ひとつ気がついたことは、この河川というのは、もともと旧河道はまっすぐ流れていたんですけれども、この地すべり地帯が動いたのがおよそ1万3千年前ですけれども、それに伴って河道が、こちらの北側の方にシフトするということが起きています。この河道屈曲も、これが地すべりであることを証明しています。つまり、国交省が言っている地すべりを否定したものは全て地学的に見てでたらめであるということがひとつ。次に、この地域で実際に何が起きているかと言いますと、通常は連続雨量120mmで道路や鉄道を停止します。その背景には、土砂災害をもたらす崩れやすい応桑層という山体崩壊物の存在が大きいわけですね。こういう場合、ここにダムを造って飽和させる、こういうことをやれば、結局ここがまたゴロゴロと崩すことになりまして、ひどい場合は、全層崩壊ということが起こりうるということなんです。こうした基礎的なことを認識されていないで、ここにダムを造ろうとしているのは、大きな愚直ですし、危険であるということになります。実際にもっと簡単な話をいたします。八ッ場ダムでどうして、吾妻溪谷に大規模な土砂災害が起きるのか。また八ッ場ダムを造らなくても、この溪谷、見晴台をはじめとして、溪谷は砂防機能を持った天然の防災ダムということもご説明したいと思います。これはちょうど川原湯の駅から下流をみたところですね。適度に土砂が流れることが逆に言うと長野原町民の安全を守るということになるわけです。これは皆さんよくご存じの2011年の集中豪雨で起きた、実際の土砂ダムですね。大雨に伴って深層崩壊を起こしたりして、河道が止められる。そして上流には湖が出来る場合もあります。この状態を放っておくと、大規模土石流が発生しますから、まっとうな河川局の人であれば、まず何をするかというと、この水を抜くことを行います。水を抜くことによって、この斜面を安定化させるという方法をとるわけですね。つまり、八ッ場ダムを造るということは、実は、この崩れ落ちた土砂の真ん前にわざわざダム堤を造って水を出し入れするという、極めてずさんなことをやることになります。これを繰り返せば当然地すべりは再活動しますし、これは崩れ去るということですね。他にもこれに水で飽和したズブズブの状態の中で地震が起これば、確実にこれは下流域にとって大災害をもたらすことになるということですね。これが、過去に起こった災害の全ての結論です。およそ1万3千年ほど前にこの上湯原の地すべりが動いたことによって河道が北へ移動する。そして、この辺は開口性の割れ目ができている。その後川が侵食をする形で現在の谷を造りました。しかし、この部分だけでは実はありませんで、上湯原の東側のところ、あるいはやんば館、皆さんよくご存じのところ、深層崩壊の爪痕があります。これらは、簡単に言いますと、もともとV字の谷を造っていたところを埋めた場所、その境目の部分が、地下水と飽和するあたり、地震動などを加えて一気に崩れ落ちていくんですね。そういう事態が1万3千年前に起きているということです。つまり、今後もこれは起こりうるということです。それを端的に説明するのは、なぜここで地すべりが落ち着いたかということです。その最大の理由は、埋まったところを綺麗に谷を掘ったおかげ、ただ、基底部を更に掘っておいて

くれたおかげでこの水が抜けたわけです。それによって不透水層そのものが切れる形ではってました。そこへ水を入れたら壊れるという、これは常識的な判断でございます。他にもダムの堆砂量についての問題があります。これは非常にひどい、実際に活火山の流域で八ッ場ダムは、霧積ダムと2つありますけれども、これに類するものは実は全国探してもありません。更にひどいのは、この堆砂量の中でウォッシュロード降下を議論しているんですね。ウォッシュロードというのは、水が流れることによって土を流せる、だから堆砂はそんなに進まないんだといっています。同じ条件の霧積ダムはどうかというと、実際に計画に対して3倍のスピードで埋まっています。流域わずか20.4です。八ッ場ダムの場合は、3倍としても、それにしても流域面積が広がりますから、かなりの割合で、33倍の流域面積を持っていますから、おそらく簡単に埋まるだろうと思います。これはその火山の現在の活動史です。だいたい300年から800年周期です。つまり、300年、800年周期ということは、運用中、運用後にも噴火が起きたりすれば、これは埋まるということです。実際に、C、B、天明の軽石の噴出量は、少なくとも、1億tから最大で10億tぐらい出てますから、泥石流対策で1億tで止められるという、こういう稚拙な防災は明らかに間違いです。これは群馬県が最新のものとして出してきた昭和6年の地震を考慮しないで作ったシミュレーションの分布図です。これは地質を入れてパソコンでたたけば、こういう図は簡単にできますけれども、注目していただきたいのは八ッ場ダムです。ここは全然印がないです、無印です。吾妻溪谷は応桑層のおかげで危険性があるという指摘がありましたけれども、このように、地震と斜面崩壊をやっているんですけれども、他の部分の河岸斜面の崩壊は、これ全部抜けています。どうも防災に対しても縦割りが進行しているようにしか思えません。これは最後になりますけれども、実際に西埼玉地震による液状化、埼玉県の低地帯を含めてかなりの低地で起きています。この測候所の記録をきちんと反映させていけば、むちゃくちゃな土地開発は起きませんでしたし、3.11以降の液状化も起きなかったと思います。そしてこれは榛名山の周辺で起きている、歴史時代のもの、あるいは3万年以降の災害の土砂移動の分布、こういうものを一切反映しないで河川整備計画をやるのは極めて馬鹿げているというふうに思います。最終的にいいますと、ここでダムを造るというのが実は一番最悪の選択を産みまして、下流域の大規模災害へつながるということです。一番安全なのは現地再建、次はダム中止で水を張らない形が代替地再建であるということです。繰り返します、このようにしてダム中心の治水計画は破綻しておりますし、今お見せしたように、国交省の出してきた図は多分コンサルに丸投げしたものだと思います。それをチェックしなかった。それによった情報操作によるものであって、しかもそれを学術会議がチェックできなかった。そして、火山や地質、災害について研究している人間が一人も入っていないで、この計画が作られているのは極めて矛盾であると思います。3.11を受けてもこういった部分の放射性物質の除去をはじめとして、保水力向上のための政策をきちんとやる方がまず第一だろうと。そして地元の皆さん、苦しめられた60年苦しんだ方達が、更にこれから10年、20年、多世代にわたって苦しむような馬鹿げた計画は止めていただきたいというのが趣旨でございます。以上です。

以上